kyogei 音楽教育セミナー2023

中学校編　授業が変わる！器楽から学びを広げよう

日　時：　12月3日(日) 10:30～12:20
講　師：　齊藤 忠彦 先生（信州大学教育学部 教授）
　　今井 由喜 先生（渋谷区立渋谷本町学園中学校 教諭）
コーディネーター：　長谷部 匡俊(作曲家)

◇齊藤忠彦先生資料

2023. 12. 3
Kyogei 音楽教育セミナー　中学校編

授業が変わる！器楽から学びを広げよう！

スピーカー　：　齊藤 忠彦，今井 由喜
コーディネーター：長谷部 匡俊

10:30～10:40 はじめに
10:40～11:10 ① 器楽の授業の多様化と学びの広がり
11:10～11:25 ② 器楽の授業実践及び器楽から広がる授業実践の紹介＜前半＞
11:25～11:35　＜休憩＞
11:35～12:00 ② 器楽の授業実践及び器楽から広がる授業実践の紹介＜後半＞
12:00～12:15 質疑応答など
12:15～12:20 おわりに

1

はじめに

＜齊藤忠彦＞
- 出　身：長野県
- 職　歴：公立中学校教員→信州大学教員
- 研　究：音楽科の存在意義，教材開発，最近は 生成AI，ウェルビーイングに関心。
- 趣　味：おもしろい音探し，楽器収集

＜今井由喜＞
- 居住歴：千葉県 東京都
- 卒　論：声明について
- 教員歴：東京都公立中学校教員（江戸川区→足立区→渋谷区）
- 音楽歴：お囃子の会，和太鼓の会，笙・篳篥・竜笛を吹いたことがあります
- 趣　味：散歩
- 希　望：月下美人を咲かせること

＜長谷部匡俊＞
- 出　身：東京都
- 職　業：作曲家
- 作　品：「朝の風に」「星座」「クラッピング・ラプソディ（全3曲）」合唱曲「蒼鷺」など。
- 音楽歴：学生時代にガムラン演奏と打楽器にハマる。現在，カトリック赤羽教会聖歌隊長として，指揮・オルガン・独唱・合唱を担当。
- 好きな音楽：古楽，民族音楽
- 資　格：ワインエキスパート（日本ソムリエ協会認定）

2

① 器楽の授業の多様化と学びの広がり －楽器に注目して－
●楽器を使って表現することの魅力とは

■そもそも「楽器」とは

・音楽の道具 MusicalInstrument「音を出すためのもの」※世界には数えきれない楽器が存在する

・楽器はなぜ誕生したのか？　声→ 体を使って→ 道具を使って

＜相互の合図のため＞　＜信仰の場（神器）で使うため＞　＜音から音楽へ＞

【アフリカの笛】

【チベットのティンシャ】

【アフリカのベル】

【アフリカのカリンバ】

・音を出す4つの手段：「打つ」「弾く」※動的　／　「擦る」「吹く」※静的

・分類の一例：
　誕生してから変化してきた楽器（クラシック系）※正確なピッチ，音程，音量。間違ったら・・・
　誕生のときのままの楽器（諸民族系）※ 間違っても・・・

・学習指導要領での分類：和楽器，弦楽器，管楽器，打楽器，鍵盤楽器，電子楽器，世界の諸民族の楽器
　※世界のあらゆる地域と時代のあらゆる楽器を用いることができる

・楽器は見た目も美しい

3

■「楽器」を使って表現することの魅力とは

・声では出せない音を出すことができる。※声より恥ずかしくない？何かを持つという安心感。
・多様な音を味わうことできる。音色，音域，音量など。音楽表現の幅の広がり。
・声ではなく，楽器を用いて音楽表現を創意工夫することができる。
・身体感覚を伴う表現となる。※技能習得の実感（演奏できるようになった），ゲーム攻略的？
・客観的に聴くことができる。※声とは異なる
・他者と音色やハーモニーを重ね合わせる楽しみがある。
・楽器（素材など）との対話，楽器製作者との対話，作曲家との対話，自己との対話，他者との対話，指導者との対話などが実現する。

「楽器はあながたのからだではありません。
あなたの外にある，べつもの，です。・・・・・
ひとりで弾いて，ひとりで聴く。
ほかの人と一緒に弾いて，じぶんの音と，
ほかの人の音を，あわせて，聴く。・・・・・」
（小沼純一，2022）

教育芸術社「中学生の器楽」(2022)

4

① 器楽の授業の多様化と学びの広がり
●器楽の授業で身に付ける力とは

■中学校学習指導要領（音楽）平成29年（2017）告示

▼ここでは第1学年

A　表現
(2) 器楽の活動を通して，次の事項を身に付けることができるよう指導する。
　ア　器楽表現に関わる知識や技能を得たり生かしたりしながら，器楽表現を創意工夫すること。
　イ　次の(ア)及び(イ)について理解すること。
　　(ア) 曲想と音楽の構造との関わり
　　(イ) 楽器の音色や響きと奏法との関わり
　ウ　次の(ア)及び(イ)の技能を身に付けること。
　　(ア) 創意工夫を生かした表現で演奏するために必要な奏法，身体の使い方などの技能
　　(イ) 創意工夫を生かし，全体の響きや各声部の音などを聴きながら他者と合わせて演奏する技能

〔ワンポイント〕
・**ア**は「思考力，判断力，表現力等」。イ（知識）やウ（技能）と関わらせながら，どのように器楽表現するかについての思いや意図をもつ。表したい器楽表現について考え，どのように器楽表現するかについて思いや意図をもっているかどうかを評価する（発言やワークシートなど）。
・**イ**は「知識」。〔共通事項〕の音楽を形づくっている要素などを手がかりにする。音楽を形づくっている要素などを用いて説明できるかどうかが評価のポイント（ワークシートなど）。
・**ウ**は「技能」。思いや意図を実現するために必要となる技能。必要性を実感しながら技能を身に付けたかどうかが評価のポイント（観察，演奏など）。

5

・歌詞（言葉）の意味に頼らずに，楽器の音色や楽曲の構造などから曲想をとらえ，自己のイメージなどをふくらませ，器楽表現を創意工夫する。
・演奏の技能を身に付ける。
・読譜の力を身に付ける。
・楽器の構造やルーツ等について知る。
「楽器は，民族の文化や音楽を理解する貴重な素材であるとともに，その文化におけるシンボルであり，あるいは文化的，社会的な意識や思考を解きほぐす糸口の一つ」（藤井知昭，1988）
・他者と合わせる技能を身に付ける。
「自己が集団の中に溶け込んでいき一つの集団としての主体的な活動が起きている場」
（佐藤公治，2012）

6

Sample

① 器楽の授業の多様化と学びの広がり
●時代とともに進化する器楽の授業の多様化と学びの広がり

＜歴史的なこと＞

1950年代 附属長野小学校の実践から

■**楽器がなぜ授業に導入されたのか？（1950年代頃）**
- 歌以外の音楽表現の手段の拡充のため（歌が苦手な子どももいる）。
- 学校で使える楽器が開発されたから。
- さまざまな音色やハーモニーのよさを味わえる。

■**小学校学習指導要領における楽器の扱いの変遷**
- 1960年代　「ハーモニカ」や「オルガン」が使われた。
- 1970年代　「鍵盤ハーモニカ」が登場。
- 1989年　「リコーダー」という名称が登場。

- 平成10年（1998年）以降，小学校学習指導要領では，具体的な楽器名が示されているが，「〇〇など」と記されていることから，学習の目的に合う楽器であれば，何の楽器でも使用が可能。

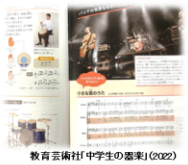
■**器楽教育の発展とその後**
- 1950～1960年代は，楽器産業界と学校教育機関が連携し，子どもたちのための器楽教育の在り方について，真剣に考えた。楽器産業界の威信をかけていた。・・・しかし，その後は？？

音楽之友社「月刊 器楽教育10月号」(1958)

7

＜課題＞
- 個人持ちの楽器は「鍵盤ハーモニカ」や「リコーダー」のまま？ ※ ともに「吹く」楽器
- 子どもたちの憧れの楽器とは？ ※今の時代に生きる子どもたちの生活や社会とのつながり
- 学校の備品として設置されている楽器の老朽化，購入予算の激減
- 楽器を用いての音楽を表現することの喜びに繋がっているか？
- 演奏に関わる技能の差の問題

＜多様化の時代へ＞
- 取り扱う楽器の多様化（リコーダー，ギター，ウクレレ，キーボード，篠笛など。カホンやジャンベなどの打楽器も。プラスチック製楽器を用いる可能性。手作り楽器，そして新たな楽器開発も・・）。
- 楽器を選択できるようにしてもよいのでは。＜個別最適な学び＞
  それぞれに好きな音は違うはず。奏法等はデジタル教科書やYouTubeでも学べる時代へ。
  「われわれは音に対しては，どちらかと言えば好き嫌いの感情で反応している部分が多いのではないか」（郡司すみ，1989）
- 個人で習っている楽器や部活動（地域クラブ）で演奏している楽器などを含めて，いろいろな楽器を持ち寄る場面があってもよいのでは。多様な楽器の音色に触れることができ，音の重なりを楽しむことができる。技能差を活用する。
  ＜個別最適な学び，協働的な学び＞
- 器楽曲として扱う音楽ジャンルの多様化（バンドスコアなども）
- ICTの活用（「ガレージバンド」などの利用



教育芸術社「中学生の器楽」(2022)

8

＜多様化の時代へ＞ の続き
- 五線による読譜だけではなく，即興演奏，聴奏法（範奏－模倣），唱歌（しょうが）なども。
- いろいろな音色が出せるキーボードの活用。合奏もできる。補助楽器というイメージからの脱却。
- 他の活動分野との関連
  歌唱：旋律や副次的旋律を楽器で奏でる
  創作：リズム創作，箏などを用いての日本の伝統的な音階での創作
  鑑賞：鑑賞曲の一部の旋律を演奏する体験など。管楽器を音を鳴らしてみる体験など。
  他教科：カホンなどの楽器をつくるなど
- 人間とAIの合奏の時代も到来？
- 器楽の授業は楽器との出会いのチャンス（生涯学習へ）。＜個別最適な学び＞
- 器楽の授業の創造を！

参考文献等

小原光一（2022）『中学生の音楽』教育芸術社
郡司すみ（1989）『世界楽器入門 好きな音 嫌いな音』朝日新聞社
郡司すみ（2022）『世界の音 楽器の歴史と文化』講談社
齊藤忠彦・菅裕（2019）『新版 中学校・高等学校教員養成課程音楽科教育法』教育芸術社
佐藤公治（2012）『音を創る，音を聴く』新曜社
藤井知昭（1988）『楽の器』弘文堂
文部科学省（2018）『中学校学習指導要領（平成29年告示）解説音楽編』教育芸術社

AI合奏技術－研究開発－ヤマハ株式会社（yamaha.com） https://www.yamaha.com/ja/about/research/technologies/music/

9

◇今井由喜先生資料

Kyogeiオンラインセミナー2023

「授業が変わる！
器楽から学びを広げよう」

渋谷本町学園中学校
今井　由喜

存分に楽器を触る

必要な奏法・
身体の使い方

音色・響き－奏法

楽器を使って表現することの魅力とは？

楽しい

やってみたい

Sample